# 『蜻蛉日記』における雨天の叙景
## ―天禄三年二月・閏二月記事群と『千載佳句』との関連を通して―

岩﨑静香

### 一　はじめに

本稿では、『蜻蛉日記』（以下『蜻蛉』とも）下巻の天禄三年二月・閏二月記事群の雨天の叙景に着目し、同作品内および他作品との叙景表現の比較や、平安朝における漢詩受容のあり様の検証を通して、当該記事群の叙景表現の特異性・独自性を明らかにするとともに、漢詩句の取り込みの具体相について考察する。

「嘆つ、独寝る夜のあくる間はいかに久しき物とかは知る」は、道綱母詠として著名な一首である。『大鏡』にも採られ、道綱母は「きはめたる和歌の上手」と讃えられている。彼女が歌人として高く評価されたことを示す例は枚挙に暇がなく、その「和歌の上手」によって記された『蜻蛉日記』の価値が、地の文における引歌によって表現上の飛躍的な進歩をもたらした点に認められることは、先行諸氏の指摘するとおりである。例えば、鈴木日出男氏は、「歌語でもあり引歌提示部分にもなる物象叙述が、風景をかたどる言葉として機能し、他の語句と有機的にひびきあって独自な文脈を形成しようとする」ことを論じ、『蜻蛉』においては引歌が独自な文脈形成に積極的に関わっており、仮名散文の新たな方向を拓いたと述べる。[1] 秋山虔氏は、「和歌のイメージ、和歌のことばに吸引されて作者の内部経験が意識化される、と同時にその和歌のイメージ、和歌のことばに新たなる意味を再生産して文脈の展開する場が形成される」ものとして「地の文に融合する引歌表現」を捉え、一つの様式として『源氏物語』の文章に完熟することを指摘した上で、表現史的位置づけを深く考えることの必要性を説く。[2]

一方で、『蜻蛉』においては、漢詩文の取り込みも散見する。例えば、天禄三年閏二月の記事群中に、「八日、雨降る。夜は石の上の苔苦しげに聞こえたり。」とある。これは傅温の「夜雨偸穿石上苔」に依拠した表現である。[3] 漢詩句の和文化は、引歌によって新たな表現形式を獲得した作者にとって、どのような意味を持つものであったのか。明確な志向性を持った叙述として捉えられるか否かを論証する過程で、道綱母の散文叙述者としての意識に迫り、その表現史的価値を再考することが本稿の目的である。

### 二　『蜻蛉日記』雨天の叙景の変容

『蜻蛉』の叙景表現をみると、雨天の叙述が多い。伊藤博氏による自然に関する叙述の分類[4]を参考に、次に示すa～dの項目を立て、『蜻蛉』における雨天の叙述を機能に応じて分類した。ただし、本稿にて論究するのは語り手としての雨天の叙述の仕方であるため、

会話文中や歌中の「雨」、「涙の雨」といった比喩、また、巻末歌集については考察の対象外とした。

a　歌の題材としての雨

b　天候の記録に留まる雨

c　具体的な出来事や記憶を伴う雨

(1)作中人物の言動を規定する雨

(2)出来事時点の背景に留まる雨

d　具体的人事から切り離され断片化した雨

次に引くのは、二度目の初瀬参詣の一場面で、c(1)の例である。

それより立つほどに、雨風いみじく降りふぶく。三笠山をさしてゆくかひもなく、ぬれまどふ人多かり。からうして、まうで着きて、御幣奉りて、初瀬ざまにおもむく。……〈中略〉……いみじき雨いやまさりなれば、いふかひもなし。からうして、椿市にいたりて、例のごと、とかくして出で立つほどに、日も暮れはてぬ。雨や風、なほやまず、火ともしたれど、吹き消ちて、いみじく暗ければ、夢の路のここちして、いとゆゆしく、いかなるにかとまで思ひまどふ。　（中巻）

ここでは、「雨」が具体的な経験の中に描かれており、人物の言動に作用している。このように、雨が人物たちの可視的な言動を引き起こす要因となっているもの、また、具体的な過去の記憶を呼び起こす要因となっているものについては、c(1)とした。

まして、これよりは、なにせむにかは、あやしとももせむと思ひつつ、暮らし明かして、格子などあぐるに、見出したれば、夜、雨の降りける気色にて、木ども露かかりたり。見るままにおぼゆるやう、

夜のうちはまつにも露はかかりけり明くれば消ゆるものをこそ思へ　（中巻）

これはaの例である。作者が作中人物でもある『蜻蛉』においては、独詠が作中人物としての行為であるか語り手としての叙述であるか断定できないため、c(1)とは別にaの項目を立てた。作者の独詠につながる「雨」については、自詠か引歌かを問わずaと分類する。一方で、「雨」を題材とする詠歌を媒介にして他者とのやりとりが成立するものについては、c(1)・a双方の機能を持つものとする。『蜻蛉』において、「雨」の主たる機能はc(1)とaである。ことさらに雨天を一場面の光景として描くわけであるから、雨ゆえの出来事が記されてしかるべきであるし、歌才を高く評価された作者が「雨」という風物を題材とした歌を記すこともなんら不自然ではない。『更級日記』における「雨」もまた、同様の機能を果たす。

『蜻蛉』以前に成立した『土佐日記』（以下『土佐』）の「雨」は、次に示すように、天候の記録として機能するのみである。雨そのものに事件性があるとはいえ、雨に起因する具体的な出来事と言えるほどの記述はなく、航程が進んだか否か程度の記述に留まる。

十二日。雨降らず。ふむとき、これもちが船の遅れたりし、奈良志津より室津に来ぬ。十三日の暁に、いささか雨降る。しばしありてやみぬ。……〈中略〉……十四日。暁より雨降れば、同じところに泊まれり。　（『土佐日記』）

考察のはじめ、この『土佐』の「雨」のような機能を想定してbの項目を立てたが、『蜻蛉』においてはどうも認められそうにない。

十七日、雨のどやかに降るに、方塞がりたりと思ふこともあり、世の中あはれに心細くおぼゆるほどに、石山に一昨年詣でたりしに、……　（下巻【天禄三年二月】）

十六日、雨の脚いと心細し。明くれば、この寝るほどに、こまやかなる文見ゆ。……　（下巻【天禄三年閏二月】）

これらは降雨の記述に加えて、具体性のある出来事が記されている。前者は夢解のエピソード、後者は兼家来訪のエピソードがそれぞれ後に続く。だが、「雨」という天候は、後続のエピソードとの明確な関連を持たず、人物の具体的言動や記憶に直接働きかけるものではない。「雨」そのものが話題として広がっていかないという意味では、『土佐』の「雨」に最も近いと言える。だが、「のどやか」や「心細し」といった精神的感性による表現とも相俟って、単なる天候の記録と捉えるには疑問が残る。さらに特異なものとして本稿で論究する雨天の叙景が、下巻に見える次の五例である。

Ⅰ【天禄三年　二月一日】

①明くれば二月にもなりぬめり。雨いとのどかに降るなり。格子などあげつれど、例のやうに心あわたたしからぬは、雨のするなめり。されどとまるかたは思ひかけられず。とばかりありて、「をのこどもはまゐりにたりや」など言ひて、起き出でて、なよよかなる直衣、しをれよいほどなる掻練の袿一襲垂れながら、帯ゆるるかにて、歩み出づるに、……〈中略〉……雨皮張りたる車さし寄せ、をのこどもかるらかにて、もたげたれば、はひ乗りぬめり。下簾ひきつくろひて、中門より引き出でて、さきよいほどに追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。

②日ごろ、いと風はやしとて、南面の格子はあげぬを今日、かうて見出だして、とばかりあれば、雨よいほどにのどやかに降りて、庭うち荒れたるさまにて、草はところどころ青みわたりにけり。あはれと見えたり。昼つかた、かへしうち吹きて、晴るる顔の空はしたれど、ここちあやしうなやましうて暮れはつるまで、ながめ暮らしつ。

Ⅱ【同年　二月十二日ごろ】

いかなるにかありけむ、このごろの日、照りみ曇りみ、いと春寒き年とおぼえたり。夜は月明し。③十二日、雪、こち風にたぐひて、散りまがふ。午時ばかりより雨になりて、しづかに降り暮らすにしたがひて、世の中あはれげなり。

Ⅲ【同年　二月下旬から閏二月一日】

このごろ、空の気色なほりたちて、うらうらとのどかなり。暖かにもあらず、寒くもあらぬ風、梅にたぐひて鶯をさそふ。鶏の声など、さまざまなごう聞こえたり。屋の上をながむれば、巣くふ雀ども、瓦の下を出で入りさへづる。庭の草、氷に許され顔なり。

④閏二月のついたちの日、雨のどかなり。それより後天晴れたり。

Ⅳ【同年　閏二月八日】

八日、雨降る。夜は石の上の苔苦しげに聞こえたり。

Ⅴ【同年　閏二月下旬】

……このごろ、庭もはだらに花降りしきて、海ともなりなむと見えたり。

今日は二十七日、雨昨日の夕より降り、風残りの花を払ふ。

Ⅰの「雨」のみが、作中人物である兼家に働きかけており、Ⅱ～Ⅴは、雨に起因する具体的な出来事も記されていなければ、光景を題材に歌が詠じられているわけでもない。伊藤氏は傍線部③や④を単なる天候の記録として分類し、次のように述べる。[5]

「単なる天候の記録」が……〈中略〉……下巻はじめの天禄三年一月から三月までの四か月間に集中している。これは月日がこまかく記述されている期間である。細かい日付や、この「単なる天候の記録」は、漢文日記のそれとまったく同趣で、いわば習慣的に記されたとも思われる叙述方法である。

確かに、この記事群はとりわけ日次の形が意識されている。だが、むしろ、日次の形で記しているにも関わらず、「このごろ」や「日ごろ」という日時不定の概括的な表現を用いてことさらに叙景を差し挟むのである。その作者の意図が、単にエピソードがないという空白を埋めること、あるいは、官人の日記のように実録することにあるとは考えにくい。そこで、新たにdの項目を立てた。

同日内に具体的な出来事の記述はなく、天候の記録を意図してもいないとすれば、通常、日記に記す天候の機能からは逸脱している。さらには、道綱母という一人の作中人物の心情を記したとも、過去に見た光景を回想して写実的に描いたとも捉えられそうにない。読者が心中に光景を思い描く効果が認められるのみで、場面の背景は存在するにも関わらず、その前面にくるはずの登場人物がいないような違和感をおぼえる。稿者の分類項目の「具体的人事から切り離され断片化した雨」とは、「《作者》によってなされた、《過去の事実や実在としての道綱母》および《作中人物たちが織り成す事件や心情》から切り離された、断片的な雨天の叙景」ということである。

伊藤氏は当該記事群について「中巻からの日次記的性格を惰性的に受けついできた」と述べる[6]一方で、中・下巻の雨の叙述における作者の意識の違いを指摘してもいる。氏の論[7]によれば、特に中巻では、先掲の「夜のうちは」の独詠の場面のように、雨天の叙述は道綱母の嘆きと関わりを持った表現であったのだが、下巻になると述べ方にいくらか違いがみられるようになり、雨から涙を連想させる表現がなくなる。その例として、傍線部①②④を挙げ、加えて、Ⅳを例示しながら、中巻のような悲痛なる独白述懐の和歌がなくなったこと、そして、古詩をひいた述べ方、自然描写に道綱母の余裕がうかがえることを指摘する。傍線部③についても、「中巻にみられたような、道綱母のいらだち・嫉妬・反抗・苦悩・悲嘆などはうかがえない」とする。この指摘と関連して、先に挙げた二月十七日・閏二月十六日も含めて、天禄三年二月・閏二月記事群では、静謐さを帯びた「雨」が多くを占める点にも注目したい。「雨」が「のどか（のどやか）」で「しづか」なものであることが、道綱母個人の境遇およびそれに伴う心情の変化に起因するか否かはともかく、『蜻蛉』の雨天の叙景は、当該記事群を中心に変容したことがうかがえる。では、このような雨天の叙景が他作品にも見られるのだろうか。

『蜻蛉』以降の作品である『源氏物語』（以下『源氏』）において、『蜻蛉』当該記事群のような雨天の叙景を探ってみると、「雨」に起因する具体的な事件が描かれるc(1)に属するもの、また、「雨」によって人物たちが詩情を催し、詩歌を詠ずるという場面もあり、c(1)の

機能に付随してaの機能も確認できる。ただし、「雨」が必ずしも人物の言動と直接の関わりを持つのか、言い換えれば、「雨」が人物の言動を規定するのか、というとそうではない。

雨など降りてしめやかなる夜、后の宮に参りたまへり。御前のどやかなる日にて、御物語など聞こえたまふついでに、「あやしき山里に、年ごろまかり通ひ見たまへしを、……

（『源氏物語』手習）

これは、薫が浮舟の一周忌（実際は亡くなっていない）を過ぎ明石中宮のもとを訪れる場面の導入部で、c(2)の例にあたる。浮舟を失った悲愁を中宮に語るが、薫は「雨」であることを理由に中宮を訪ねたわけではないし、二人の会話に「雨」が持ち出されることもない。天候の記録という機能が存在しない『源氏』において、この「雨」は、明確な意図を持つ作者によって作り出された背景である。「しめやかなる夜」を演出する「雨」は、物語の背景として、薫の心情が投影され、『蜻蛉』Ⅱ～Ⅴのように、《作中人物たちが織り成す事件や心情》から雨天の叙景が切り離されることはないのである。

人物の心情を投影する背景が設定されることは、現代では自然なことだが、『源氏』以前の物語では、このような「雨」は描かれない。歌物語では、詠歌事情を説明する歌語りの中に「雨」が設定され、作り物語では、人物の言動を規定し、事件性を帯びた具体的な場面を作り出すものとして「雨」は機能する。つまり、『源氏』以前の物語の「雨」は、c(1)およびaの機能の範疇で分類できる。そして、それらの中には、『蜻蛉』や『源氏』に見える静けさを帯びた「雨」は一切見当たらない。『源氏』では、「のどか」「のどやか」の他、「すこし」「しめやか」「しめる」「なごり」など品詞的にも多様な語句によって、雨天の静けさが演出される。

本節の冒頭に述べたように、『蜻蛉』では、雨天の叙述が非常に多く、「雨」だけを取り上げれば、その用例数は『源氏』以上、「時雨」を入れて同数程度である。作品全体の記述量の差からみると『蜻蛉』の「雨」の頻度がいかに高いかがわかる。多くの雨天の叙述を通して道綱母は、天候の記録や作中人物の言動に直接働きかける以上の機能を「雨」に見出し、新たな叙景表現を試みたのではなかろうか。先述した、「《作者》によってなされた、《過去の事実や実在としての道綱母》および《作中人物たちが織り成す事件や心情》から切り離された、断片的な雨天の叙景」がそれである。では、この叙景はどこから表現の着想を得たものなのか、次節で探究していく。

## 三　漢詩句を取り入れた雨天の叙景

まず、Ⅲ（第二節提示。以下、Ⅰ～Ⅴについても同様）の叙景について、先行の論を確認する。品川和子氏がその典拠を整理している。[8]「暖かにもあらず、寒くもあらぬ風」については、

不明不暗朧々月　非暖非寒漫々風

（白　嘉陵夜有懐　『千載佳句』春夜・八三）

「風、梅にたぐひて鶯をさそふ」については、「寛平御時后宮歌合」にて「先遣和風報消息　續教啼鳥説來由」（白　春生　『千載佳句』早春・九）を句題として詠まれた紀友則の、

花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふしるべにはやる

（『古今和歌集』巻一・春上・十三）

「庭の草、氷に許され顔なり」については、

樹根雪盡催花發　池畔氷消放草生

（白　歎春風　『千載佳句』早春・一三）

をそれぞれ典拠として示している。さらに次の両句についても、Ⅲの叙景との関連を思わせると指摘する。

度臘都無苦霜霰　迎春先有好風光

（白　臘後歳前　『千載佳句』早春・一一）

聲早鷄先知夜短　色濃柳最占春多

（白　早春　『千載佳句』早春・一二）

このことを踏まえ、本節では、『千載佳句』の雨詠、特に、春雨詠を中心に分析し、『蜻蛉』天禄三年二月・閏二月記事群の雨天の叙景との関連について考察していきたい。

### (1)『千載佳句』の雨詠について

『蜻蛉』当該記事群との共通性を見出せるか検証すべく、まず、『千載佳句』「四時部」の「立春」二首、「早春」二八首、「春興」四七首、「春暁」三首、「春夜」八首、「暮春」二〇首、「送春」九首の計一一七首のうち、「雨」を含む次の一九首を考察対象として挙げる。[9]『全唐詩』との異同がある部分を二重傍線で示した。

「早春」一首

①寒雲曉散千峯雪　暖雨晴開一逕花（許渾　題鄭処士　二二）

「春興」九首

②沙頭雨染班々草　水面風駈瑟々波（白　早春詞　四一）

③柳絲嫋々風繰出　草縷茸々雨剪齊（白　天津橋北馬上作　四四）

④宿雨長齊隣舍柳　晴光照出夾城花（白　自題新昌弊居　四七）

⑤林花[10]着雨燕脂落　水荇牽風翠帶長（杜甫　曲江遇雨　五三）

⑥長樂鐘聲花外盡　龍池柳色雨中深（李播　無題或餞赴闕下贈閻舍人　五五）

⑦細雨湿衣看不見　閑花滿地落無聲（劉長卿　送厳士元　五八）

⑧虹横布水臺南雨　雁返鑪峰頂北霞（喩鳧継　送歐陽孝廉及第帰彭澤　五九）

⑨雨拂青々行處草　煙含灼々望中花（陸翬　春日　六〇）

⑩雨中草色綠堪染　水上桃花紅欲燃（王維　輞川別業　六三）

「春夜」二首

⑪春風暗剪庭前樹　夜雨偸穿石上苔（傅温　山居　八五）

⑫閑臥東風燈漸曉　溪南花氣雨中來（喩鳧継　溪居雨夜　八七）

「暮春」六首

⑬殘鶯着雨慵休囀　落絮無風凝不飛（白　酬李二十侍郎　九五）

⑭両岸楊花風作雪　一池荷葉雨作珠（陳潤　題山陰朱微君隠居　九七）

⑮渭水橋邊春已渡　灞陵原上雨初晴（恵文太子　同李士懐長安　一〇一）

⑯櫻桃帶雨煙脂湿　楊柳當風綠線低（劉禹錫　題裴令公亭　一〇二）

⑰夾岸柳絲懸細雨　繡田花朶弄殘春（杜荀鶴　淮陽春日　一〇五）

⑱風吹笋籜飄紅砌　雨打[11]桐花盖綠莎（元　和楽天題王家亭子

一〇七）

「送春」一首

⑲愁曰暮雨留教住　春被殘鶯喚遣歸（白　閑居春尽　一一〇）

漢詩句の構造的側面から、これら一九首に見える「雨」を次のように分類した。

A　「風」の対比としての「雨」　②③⑤⑪⑫⑬⑭⑯⑱

B　「晴」へと転じる「雨」　①④⑮

C　草木に降る「雨」　②③④⑤⑥⑨⑩⑯⑰

・「草」②③⑤⑨⑩

・「柳」③④⑥⑯⑰

・草色との関連　②⑤⑥⑨⑩⑯

・生長との関連　③④⑤

D　花に降る「雨」　①⑤⑥⑦⑨⑩⑫⑯⑱

・花色との関連　⑤⑨⑩⑯

・落花との関連　⑦⑱

・その他　①⑥⑫

なお、⑧の「雨」は構造的に「霞」の対比となっているが、『全唐詩』に見えぬ詩句であり、これ以上の考察が難しく、また、⑲は一九首中、唯一の「送春」の雨詠であるからか、ここに挙げたどの観点にも該当しないため、両者については分類していない。

観点ごとに考察を進める。まず、Aについてだが、考察対象とした漢詩句の大半が対句の構造を成し、詩句の前半と後半で「雨」と「風」を対比的に詠んだものが多い。⑫は、風雨の両者が詠み込まれているが対句を成していないため、括弧付で示してある。『蜻蛉』の当該記事群の叙景において、先掲のⅠⅡⅤと「風」「雨」を並べる叙述は複数ある。ただ、対比的構造を成すとまで言えそうなのはⅤのみか。なお、和歌にも、長歌の特質として対句的表現があるため、春雨に限らず、風雨の対比は日本においても定着していた。よって、『蜻蛉』において「風」と「雨」が並立あるいは対比的に叙される点は特筆に値しないだろう。

Bについて、①④⑮いずれも対句の構成になっているが、晴天と雨天とを対比的に詠じたものは④のみで、雨が晴れるという天候の時間的変化を詠み込むものすべてをBに含めた。C・Dの観点にも関連するが、①や④は、春雨が降りかかることで草木や花の生長を促し、雨が止んで晴れた視界の中に花が映えるという描写である。雨天から晴天へという天候の時系列的な変化は、ⅠやⅢにも見えるが、晴天との対比構造が明確であるならともかくも、散文においては取り立てて特徴として表れるものではない。晴れた視界の中に花が映えるといった描写も『蜻蛉』の方にはなく、Bの観点からは、『蜻蛉』の叙景の着想元となる要素は見出せそうにない。

C・Dについて、視界に捉えた光景としては草木や花に雨が降りかかっているのだが、詩句の構造上直接的な描写になっていないものを括弧付で示した。例えば、⑤は「曲江遇雨」（『全唐詩』には「曲江対雨」）とある詩題からもわかるように、雨に遭った場面の叙景であり、⑤の詩句は雨中の描写である。表現上、「雨」が直接降りかかっているのは「林花」だが、詩句後半の「風」に吹かれる「水荇」もまた雨に降られている。そのため、D花に降る「雨」として分類しながら、C草木に降る「雨」にも括弧付で分類した。こうし

てみると、雨の降りかかる景物としては、草木が選ばれることが多く、とりわけ「春興」の部門で顕著である。この特徴は和歌の春雨詠には見られず、草木に降りかかる雨が緑色を鮮やかにするという詠じ方は漢詩の方に優勢であり、⑥「柳色雨中深」を句題とする「浅緑いとに玉ぬく青柳もふりくる雨に色をそへつつ」（『大納言為家集』八八）など、漢詩の翻案歌にはよく見える。これに通ずる叙景が、Ⅰの「草はところどころ青みわたりにけり」に表れている。また、Ⅰについて、花との関連は『蜻蛉』のⅤ（Ⅱも疑わしいが、これについては次項で論じる）に見えるが、花色を表現するものではなく、落花としての描写である。⑱とⅤは落花がその下の草を覆うというところに共通点を見出すことができる。だが、⑱句中の「笋籜」「桐花」という表現と比べてⅤの方は具体性を欠き、⑱の原詩にもⅤの[12]「海」に結び付く表現は見られず、直接の典拠とみることまでは不可能だろう。ただ、Ⅴが落花狼藉の様を対句的に表現する点から、漢詩に依拠するであろうことは先行研究で既に指摘され、川口久雄[13]氏や矢作武氏、[14]伊牟田経久氏[15]らがその典拠について論じている。

『千載佳句』「四時部」では、雨天の春景を詠じる上で、草花の色彩を表現した視覚的な詠が多数を占める。しかしながら、必ずしも視覚的に表現されるのではなく、⑥⑪⑬のように聴覚的に、あるいは嗅覚的【⑫】・触覚的【⑦】にも表現される。中でも、「春夜」の部門において、雨が視覚以外の感覚で捉えられるのは述べるまでもないことである。雨をどのような感覚で捉えるかという点について、考察を加えるため、続いて「天象部」の雨詠を取り上げる。

「天象部」は一五部門[16]から成り、うち「雨」「風雨」「暮雨」「雨夜」の四部門を考察の対象とした。なお、季節については「天象部」の中に共通性は見られない。

「四時部」の春雨詠では、雨の降りかかる対象が草木花であり、色彩のコントラスト（主に緑色と紅色の対比）を表現した視覚的な詠が多かった。一方、「天象部」の雨詠は、「四時部」の春雨詠と同じく対句の構造になったものが多いが、雨の働きかける対象については、草木花あるいは鳥などの生命を有したものに対してというよりも、「洪河【次に示す1】」や「泉」[17]「江【次に示す2】」といった雄大な自然の水勢に対して働きかけており、色彩的なコントラストの要素はほとんどない。次のように、視覚的描写と聴覚的描写とで対を成すものが多い。

1 洪河擁沫流仍急　蒼嶺和雲色更寒（盧倫　喜雨　雨・二七八）
2 日色悠揚映山盡　雨聲蕭颯度江來（白　百花亭晩望夜帰　暮雨・二八三）

次に、聴覚的に捉えられる部分はどのようであるのか見てみたい。「天象部」の方では、作者の眼前で雨が降っている詠は少なく、1のように雨はすでにあがっていたり、次に示すように、降雨を雨声によって確認したりするものが多い。

3 風吹竹葉休還動　雨點荷心暗復明（元　雨声　風雨・二八二）
4 耿々殘燈背壁影　蕭々暗雨打窓聲（白　上陽白髪人　雨夜・二八五）

3の方は、『千載佳句』収載部は視覚的描写のようだが、詩の四句目に[18]「慣聞寒夜滴篷聲」とあり、詩題も「雨声」であることから、雨音を聴覚で捉えた詩でもある。また、先掲の2は詩を詠じる時点

において作者の眼前にあるのは八句目の[19]「滿湖明月」であり、「雨聲蕭颯度江來」は通り雨の描写である。「日色」と「雨聲」が対を成しており、降雨はやはり聴覚で確認される。「四時部」の春雨詠で、聴覚的な叙景の要素を含むものは⑥⑦⑪⑫⑬⑲である。しかし、こちらでは雨声を直接表現したものは少ない。⑥は鐘の余音、⑦は花の落ちる音、⑬⑲は鶯の鳴き声との関わりの中で聴覚を働かせる。「天象部」では眼前にない雨を水声ないし雨声で表現し、「四時部」の春雨詠では眼前にある雨を他声を通して表現する（ただし、「春夜」の⑪に関しては前者の要素が強い）。

4についてであるが、『千載佳句』を原拠の一つとすると考えられる『和漢朗詠集』（以下『朗詠集』）、その「秋夜」の部門にも収載される。[20]なお、『千載佳句』では「天象部」に属した「雨」の部門だが、『朗詠集』では「春」の部に属する。次に示すのは、『朗詠集』「春」の部の「雨」に収載されたものである。

斜脚は暖風の先づ扇ぐ處　暗聲は朝日のいまだ晴れざる程

斜脚暖風先扇處　暗聲朝日未晴程　保胤

（『和漢朗詠集』上・雨・八四）

これが4を踏まえたものであることは、本間洋一氏が指摘している。[21]4において、詠じられたのは秋の雨景であり、公任が「秋夜」の部門に置いたのは当然のことである。しかし、保胤は「春」の叙景として「暗声」を詠じた。これには『千載佳句』の存在が影響していたと考えられる。4は『千載佳句』において「雨夜」の部門に置かれたが、特筆すべきはこの一首のみで「雨夜」の部門が構成された点である。七言二句の形で詩句を蒐集した『千載佳句』では、「秋夜長」の部分が収載されなかったとはいえ、原詩を根拠に「四時部」の「秋夜」に置くことも可能であったはずである。だが、編者維時はそうせず、「天象部」に4のみをもって「雨夜」の部を立てた。保胤を含め王朝詩歌人が原詩を知らなかったということはありえないが、この『千載佳句』の部類により、「秋」の範疇を越えて、広く翻案のモチーフとなっていったのではないか。保胤の詩句は、古注釈に「微雨自東来」とある[22]点も踏まえれば、「東」の方向、つまり「春」の到来とともにもたらされた「微雨」を叙したものだと解釈できる。「暗声」の「暗」とは、「闇」「夜」という視覚的・時間的な表現ではなく、聴覚的、さらには心的な意味も含有した「暗」なのである。

一概に雨を聴覚的に捉えるとは言っても、音量の大小や水勢の緩急といった物理的な降雨状況よりも、他の景物の音との取り合わせの中で表現する点や、「蕭颯【2】」「蕭々【4】」のように聴覚で捉えた雨声を心的に表現する点が重要である。それは、『蜻蛉』における「のどか」で「しづか」な雨天の叙景が、単に物理的あるいは生理的な感覚によって支えられた表現ではなく、精神的感性による表現であることにも結び付くはずである。

### ⑵天禄三年二月・閏二月記事群の叙景表現の典拠について

さて、川口氏は『日本古典文学大系』の頭注で、「空の気色なほりたちて、うららとのどかなり」は「『独臥空牀好天気』とまさしくコレスポンドする」と述べて、白詩「不明不闇朧朧月　非暖非寒慢慢風　獨臥空牀好天氣　平明閑事到心中」との関連を示す。こ

の指摘を踏まえれば、『千載佳句』に収載された句の単位ではなく、詩全体にまで道綱母の教養が及んでいたと考えるべきであろう。その上で、Ⅱの典拠の一つとなるものとして、次の詩を挙げる。この詩の頷聯（前項⑦）が『千載佳句』に収載される。

別嚴士元　　劉長卿[23]

春風倚棹閶闔城　　春風棹に倚る閶闔（こうりょ）の城（とう）
水國春寒陰復晴　　水国春寒くして陰りては復た晴る
細雨溼衣看不見　　細雨衣を湿して看るも見えず
閒花落地聽無聲　　閑花地に落ちて聴くも声無し
日斜江上孤帆影　　日斜にして江上孤帆の影
草綠湖南萬里情　　草緑にして湖南万里の情
東道若逢相識問　　東道若し相識るの問に逢はば
青袍今日誤儒生　　青袍今日儒生を誤ると

この詩の四句目「閒花落地聽無聲」は、『千載佳句』では「閑花滿地落無聲」と、異同があるため注意を要する。前者であれば「ものしずかな花が地面に落ち、耳を澄ましてみるもその音は聞こえない」という解釈になり、後者であれば「ものしずかな花が地面に降り敷いており、そのために花が落ちても音を立てない」という解釈になる。落花の静けさを表現する点では共通するが、「聲」を「聽」くという感覚主体の有無、および、目で捉えられる光景として「滿地」の要素が有るか否かという点で差異が生じる。

この詩は友人との別れの場面を詠じた詩である。一句目・五句目に舟の描写があるが、その舟には旅立つ友人が乗っている。六句目に詠じられるのは、これからその舟に乗って友人が向かう遥か遠い湖南の光景である。七・八句目の叙情、人事的な部分については、「知人に会って尋ねられることあらば、『青袍今日誤儒生』と答えてくれ」という内容になる。「青袍」とは官服および儒者の服のことで、作者は役人として青い官服に身を包んでいるのだけれども、青色は低位の役人の服であり、実はそのことに対する失意の情が詠まれている。「誤儒生」については「青い服だけに儒者然としてふるまってしまい、それゆえに役人としての処世に失敗してしまったよ」といった解釈ができよう。不遇を嘆く身である上に、親しい友人までもが遠く去ってしまう、その惜別の情たるやいかほどか。続けて叙景について見る。一・二句目で今二人がいる地とその気候を示し、三・四句目で眼前の光景（「眼」というと視覚的に捉えているという語弊が生じるため近景とすべきか）を詠じる。五句目で友人の乗る舟に目を向け、六句目では遥か遠くの光景、言うなれば想像の光景を表現する。このように、この詩の叙景は幾層もの光景から成っており、その捉え方も、肌で目で耳で心でと様々である。

『蜻蛉』のⅡは、「このごろ……おぼえたり」とその時の気候を示し、眼前の光景（近景）に移る。風雪を目で捉え、雨を耳ないし心で捉える。そして、「世の中あはれげなり」に帰結する。「別嚴士元」の詩とは、「春寒陰復晴」という表現の類似が認められる上、複数の層の光景を叙する点やその捉え方の多様性といった点で共通する。また、「風雪を目で捉え」と先に述べたが、「雪、こち風にたぐひて、散りまがふ」というのは、単純に光景を視覚的に捉えた叙述ではないのではないか。この点を掘り下げたい。

まず、何が何と「たぐふ」のか。それはもちろん、「雪」が「こ

ち風」と「たぐふ」わけである。では、何が「ちりまがふ」のかということだが、主体は文脈から察するに「雪」である。果たしてそうか。「ちりまがふ」の用例として、古くは『万葉集』に、

秋山に落つる黄葉しましくはな散りまがひそ妹があたり見む
（『万葉集』巻一・相聞・一三七）

梅の花散り紛ひたる岡びにはうぐひす鳴くも春かたまけて
（『万葉集』巻五・雑歌・八三八）

などが見える。『古今和歌集』では、藤原敏行の

わが来つる方もしられずくらふ山木々の木のはのちるとまがふに
（『古今和歌集』巻五・秋下・二九五）

が見え、『蜻蛉』以後の作品では、

南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこしうち散り紛ふ
（『源氏物語』胡蝶）

しぐれとは蓮の花ぞ散りまがふなにふるさとに袖濡らすらむ
（『大鏡』伊尹）

などが見える。これらに共通するのは、「ちりまがふ」の主体は花や葉だという点である。「雪」との関連で「ちりまがふ」と表現した例には次のようなものがあり、両者とも「花」との取り合わせにおいてのみ「ちりまがふ」という表現がなされる。

いかで人なづけそめけむふる雪は花とのみこそ散りまがひけれ
（『貫之集』第三・三一一四）

春山のあらしのかぜに朝まだき散りてまがふは花か雪かも
（『平中物語』）

次に、「まがふ」に範囲を広げて用例を調べた。何かと何かが混じり合う・似ている、あるいは、何かと何かを混ぜてわからなくさせる・見間違えるという文脈で用いられる「まがふ」という語は、自動詞・他動詞いずれにしても、次のように、やはり「雪」と「花」との取り合わせで用いられるのである（ただし、『土佐』の方は厳密には、「波」が「雪」「花」と混同するという内容になる）。

波とのみひとつに聞けど色見れば雪と花とにまがひけるかな
（『土佐日記』）

空寒み花にまがへて散る雪に
と、わななくわななく書きて取らせて　（『枕草子』一〇二段）

なお、『蜻蛉』中に「雪」の描写は複数あるが、「雪」が「ちる」と表現したものはこのⅡ以外にはない。以上から、『蜻蛉』の「ちりまがふ」は、「雪」を単独の主体とみるよりは、目で捉えた「雪」の降る光景に「花」の散る光景を思い重ねたとみるべきである。もとの漢詩の惜別の部分は切り出されてしまい、友人の乗った舟や友人の行き先の緑繁る光景こそ表現されないが、春風やしとしとと降る雨および散る花を、その地の気候を添えて叙した点から、『蜻蛉』Ⅱの叙景の着想は、「別厳士元」の詩から得たものだと推察される。

## 四　おわりに ―「あはれなる世の中」考―

第二節でほとんど言及しなかったⅠの記事について再考する。Ⅰの場面では、前夜から訪れていた兼家の明朝の姿が緻密に描かれるが、道綱母の心情はほとんど記されることなく、「ねたげにぞ聞こゆる」と一言記されたかと思うと、すぐさま早春の自然へと叙述が移ってゆくのは、小山香織氏の指摘するとおりである。[24] Ⅰの叙景で

は雨が「のどか」「のどやか」なものとして捉えられ、春雨によって青みはじめた前栽を見やって「あはれ」という感慨が吐露される。雨の降る自然の景に対し「あはれ」と叙する例は日記中に数例見えるが、中巻の例は独詠歌につながる。その一例を示す。

今日は二十四日、雨の脚いとのどかにて、あはれなり。夕づけて、いとめづらしき文あり。「いと恐ろしき気色に怖ぢてなむ、日ごろ経にける」などぞある。返りごとなし。

五日、なほ雨やまで、つれづれと「思はぬ山に」とかやいふやうに、もののおぼゆるままに、尽きせぬものは涙なりけり。

降る雨のあしとも落つる涙かなこまかにものを思ひくだけば

（中巻【天禄二年二月】）

「降る雨の」の独詠歌は作品内現在（＝経験時現在）の道綱母の煩悶と懊悩を表現したものであるのはもちろんのこと、散文叙述の方法として、叙景の機能を果たしてもいる。日記という散文叙述を通して自身の情をどう表現すべきか、道綱母は思案したはずである。景物やそれにまつわる事件に直接起因する心情を記したのでは、単なる事実の記録や詠作事情の説明に留まってしまう。独詠歌を意図的に配した叙景を通して自身の情を叙するというこの方法は、景と情のどちらかがどちらかを規定するといったものではなく、相互に作用し合って散文部に新たな文脈を生じさせる。中巻においてこのような散文叙述の方法としての独詠歌を確立しながら、道綱母は下巻においてそれを「かひなきひとりごと」と記す。

Ⅰの叙景では、それ以前には見られなかった、自然を擬人化したような表現が目を引く。自身の「心あわたたしからぬ」心境が雨によってもたらされたことを、「雨のため」と表現するのではなく、「雨のする」と表現し、動作主体を「心あわたたしからぬ」心境にある自分から、雨という自然物へとスライドさせている。また、実景の描写としては「空晴れたれど」とすればよいところを、「晴るる顔の空はしたれど」という独自な表現を用いている。「顔」という表面の様子を示す語と、「ここち」とが対比的に用いられるが、単に自然界の外観と道綱母の心中とが対比的・相対的に描かれるのではない。「顔」とは道綱母の「顔」でもあり、だからこそ、見た目には「晴るる」様子であるにも関わらず、「ここち」が「なやまし」き状態にあることに「あやし」と記さずにはおれないのである。

自然物に人間性を帯びさせる方法は、Ⅲ「庭の草、氷に許され顔なり」や、Ⅳ「石の上の苔苦しげに」という漢詩句に依拠する表現にも取り込まれた。Ⅲは、依拠した「池畔氷消放草生」には「顔」という要素はなく、道綱母の和文的あるいは和歌的な発想に由来するものである。Ⅳの「苦しげ」というのは道綱母の心象を投影したものであろうが、依拠した傅温の詩句は、『全唐詩』等には残っておらず、叙情部分を含む詩全体の内容が不明であるため、道綱母の独創による表現か否かは判断できない。ただ、「苦しげ」な感情を抱える主体を自身ではなく「石の上の苔」であるかのように叙することで、自然物が擬人的に表現される点は指摘できよう。ⅠⅢⅣの叙景表現は、単なる客観的・写実的な自然描写ではなく、自身を投影した先の自然を、人事面の記述への従属性を持たない断片的なものとすることで、自然の叙景として自立させているのである。

Ⅰはさらに、次に示す降雪の場面へと続く。

Ⅵ【天禄三年　二月三日】

三日になりぬる夜降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。簾を巻きあげてながむれば、「あな寒」と言ふ声、ここかしこに聞こゆ。風さへはやし。世の中いとあはれなり。

この「世の中いとあはれなり」という表現に着目したい。同様の表現が同年二月の記事群では続く。Ⅱへと続いた上で、さらに

Ⅶ【同年　二月十七日】

十七日、雨のどやかに降るに、方塞がりと思ふこともあり、世の中あはれに心細くおぼゆるほどに、……

と続く。守屋省吾氏は、Ⅱについて、先掲の天禄二年二月二十四日・二十五日の中巻の叙述と比較した上で、「自然観照の域にまで達している」と評価し、「人事に関わる記述への従属性はまったく認められず、それ自体としてあくまで自立していながら、同時に人事の記述と混淆して独特な静寂さ、哀れさを醸し出している」と述べる。[25] 同様のことは、Ⅰの「日ごろ、いと風はやしとて」以下、連続して綴られるⅥの叙景にも言える。

三田村雅子氏は、上・中巻の物詣記事に見える水の風景は「蘇りの水」「癒しの水」であり、「非日常の水との出会いが全身的な感動とともに受け留められていた」と論じた上で、同じ「あはれ」という言葉で受け留められてはいても、下巻に頻出する、日常の中の変哲もない「のどか」な雨に対する「あはれ」は「道綱母一人の『私』の『あはれ』ではなく、『世の中』一般の『あはれ』にそらされ、曖昧化され、拡散化されている」と指摘する。[26] また、三田村氏は、同じような雨の風景でも、先掲の中巻独詠歌の場面では「外なる雨と、内なる苦悩から沸き出る涙が、ひとつのものとして重ねられている」のに対し、下巻では涙との共振が影をひそめ、道綱母が自身の思いを黙したままであることにも論及する。この三田村氏の論は、稿者の言う、断片的な雨天の叙景への変容と重なるのだが、留意しておかねばならないのは、対兼家の心情を叙述しないというだけでは事実の記録に留まってしまい、『蜻蛉』は自照文学としての性格を失うことになるという点である。

天禄三年二月・閏二月記事群について、斎藤菜穂子氏の論[27]を引く。

兼家への執着に囚われ続ける日常を日次によって区切りつつも日々兼家を意識していることが表出されるなかで、兼家への執着から明確に離れるべく、これまで無縁だった穏やかな春の情景を、発想も表現も異にする漢詩文表現によって描出しているのであり、これは日付のあり得ない非現実の空間なのである。

この指摘に従って言えば、次のようになろうか。ただ個人の心情を叙さないというだけでは、天候を含めた事実の記録に留まってしまう。そこで道綱母は「このごろ」や「日ごろ」という日時不定の概括的な表現を用いながら、漢詩句に着想を求めた叙景表現によって「非現実の空間」を構築しようとした。

だが、この「世の中」は、兼家への執着に囚われる現実とその執着から離れるための非現実というような、二元的な捉え方で把握できるものではない。雨を主軸として構築された「のどか」で「しづか」な空間、それこそがここに集中的に見える「世の中」であり、三田村氏の述べるところをより厳密に捉え直せば、「私」から「世の中」の「あはれ」へと曖昧化・拡散化しているというよりは、自

然界の中に人間界を包含した外界としての「世の中」に、「私」を完全に溶け込ませて、自身を非在化させているのである。つまり、「世の中」とは現実・非現実の二元で捉えられる空間ではなく、作品内主体としての自身を非在化させた作者によって俯瞰的に構築された空間なのだと言える。一個人としての自身を非在化するためには、中巻で確立した独詠歌という叙景の方法を「かひなきひとりごと」とする外なかった。代わって取り入れられたのが、漢詩句に依拠および着想を得た叙景なのである。その表現は聴覚的な要素を含みながら心的な静けさを帯びる。こうして「のどか」で「しづか」な雨は『蜻蛉』の世界を表現するなかで醸成されていったのである。

## 注

(1) 鈴木日出男「引歌の成立―古今集規範意識から仮名散文へ―」(『文学』第四三巻第八号、一九七五・八)。

(2) 秋山虔「蜻蛉日記の文体形成―地の文に融合する引歌について―」(上村悦子編『論叢王朝文学』笠間書院、一九七八)。

(3) 品川和子「蜻蛉日記における方法と源泉」(『蜻蛉日記の世界形成』武蔵野書院、一九九〇)。

(4) 伊藤博「蜻蛉日記の自然描写」(『蜻蛉日記研究序説』笠間書院、一九七六)より。

㈠次の和歌とかかわりのある叙述(詞書的叙述)

㈡天候の記録

㈢作中人物の心情とかかわりのある描写

㈣作中人物の心情および次の和歌とかかわりのある描写

㈤事件(筋)とかかわりのある描写

(5) 伊藤博「蜻蛉日記の構成」(『蜻蛉日記研究序説』笠間書院、一九七六)。

(6) 注(5)に同じ。

(7) 注(4)に同じ。

(8) 注(3)に同じ。

(9) ⑦滿地落無聲―落地聽無聲 ⑰夾岸―絡岸

(10) 『松平文庫影印叢書第十八巻 漢詩文集編』(新典社、一九九七)に依り、「家」を「花」に改めた。

(11) 注(10)と同様に、「折」を「打」に改めた。

(12) 「風吹筍籜飄紅砌 雨打桐花蓋緑莎 都大資人無暇日 泛池全少買池多」(元稹 和樂天題王家亭子)

(13) 日本古典文学大系『土佐日記 かげろふ日記 和泉式部日記 更級日記』(岩波書店、一九五七)。

(14) 矢作武「蜻蛉日記と漢詩文」(日本の古典文学Ⅰ『一冊の講座 蜻蛉日記』有精堂出版、一九八一)。

(15) 伊牟田経久「『蜻蛉日記』と漢詩文」(川口久雄編『古典の変容と新生』明治書院、一九八四)。

(16) 「月」「風月」「感月」「雨」「風雨」「暮雨」「雨夜」「晴霽」「雪」「雪夜」「春雪」「晴雪」「暁」「夜」「閑夜」

(17) 「須臾滿寺泉聲合 百尺飛簷掛玉繩」(張蕭遠 興善寺看雨 雨・二七九)

(18) 「風吹竹葉休還動 雨點荷心暗復明 曾向西江船上宿 慣聞寒夜滴篷聲」(元稹 雨聲)

(19)「百花亭上晩徘徊　雲景陰晴掩復開　日色悠揚映山盡　雨聲蕭颯渡江來　鬢毛遇病雙如雪　心緒逢秋一似灰　向夜欲歸愁未了　滿湖明月小船迴」（白居易　百花亭晩望夜歸）

(20)『朗詠集』には次の四句が載る。

「秋夜長　々々無眠天不明　耿々殘燈背壁影　蕭々暗雨打窓聲」（上・秋夜・二三三）

(21) 本間洋一「王朝漢詩の表現世界―王朝詩と白詩と―」（『王朝漢文学表現論考』和泉書院、二〇〇二）。

(22)『和漢朗詠集私注』。なお、金子元臣・江見清風『和漢朗詠集新釋』（明治書院、一九四二）に依る。

(23) 李嘉祐の作とするものもある。

(24) 小山香織「『蜻蛉日記』下巻冒頭部の表現―漢詩文引用による自然叙述と日録性―」（『中古文学』第七二巻、二〇〇三・一一）。

(25) 守屋省吾「蜻蛉日記下巻の特質と形成」（『蜻蛉日記形成論』笠間書院、一九七五）。

(26) 三田村雅子「平安女流日記文学の自然―疎外された自然・蜻蛉日記の「水」と「火」―」（女流日記文学講座第一巻『女流日記文学とは何か』勉誠社、一九九一）。

(27) 斎藤菜穂子「『蜻蛉日記』下巻における漢詩文表現群―つくり出された春の情景―」（『國學院雑誌』第一一一巻第一二号、二〇一〇・一二）。

※　使用テキストは次の通り。『蜻蛉日記』『土佐日記』『源氏物語』『大鏡』『平中物語』『枕草子』＝新編日本古典文学全集、『千載佳句』＝金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集　句題和歌・千載佳句研究篇』（培風館）、『千載佳句』所収詩句の原詩＝元白詩は『中國古典文學基本叢書』（中華書局）・その他は『親校標點　全唐詩』（宏業書局）、『和漢朗詠集』＝日本古典文学大系、『古今和歌集』『万葉集』＝新日本古典文学大系、『大納言為家集』『貫之集』＝新編国歌大観。なお、引用文中に傍線・省略の……等を施した。

（いわさき　しずか・和歌山県立田辺高等学校）